

1. アユの資源管理に関する研究費

1) 晩期にヤナで漁獲されるアユの河川への放流効果

片岡佳孝・白杵崇広・藤原公一・山本充孝・岡本晴夫*¹

【目的】

琵琶湖流入河川のヤナで漁獲されるアユは、河川へ放流するとナワバリを持ちやすく友釣りによく釣れるなど、その種苗性の高さから河川放流用種苗の中心であった。しかし、全国的に冷水病が蔓延する中、ヤナで漁獲されたアユをそのまま河川へ放流すると、冷水病を発病してへい死する場合があります、今日では放流用種苗としてあまり利用されていない状況にある。

そこで河川水温が上昇し、冷水病が終息すると考えられる7月中旬以降にヤナで漁獲されたアユ（晩期ヤナアユ）の県内河川への放流とその効果検証事業を、県が滋賀県河川漁業協同組合連合会へ委託して行った。現場ではその数的データの収集と解析を行った。

【方法】

調査河川：犬上川（犬上川ダムの上流約2kmの区間）

放流種苗：ヤナ漁獲アユ（平成15年7月23日に姉川のヤナで漁獲され、その直後に25℃～28℃で4日間の加温処理を行った。放流時の種苗は全長102.8±7.4mm、体重9.73±2.26g（平均±標準偏差）であった。

放流日：平成15年7月29日

調査内容：放流河川において8月6日（放流8日後）に放流されたアユの状況を潜水目視調査した。また、5月16日から9月11日の間に9回、付着藻類の現存量や水理状況を調査した。また、漁期間中の7月12日（解禁）～9月15日の間に友釣りによる釣獲状況を調査した。

【結果】

PCR法で冷水病菌の保菌状況を調べたところ、加温処理前は60尾中陽性が55尾であったが、加温処理後は60尾中陽性魚は確認されず、加温処理により冷水病菌を完全に除菌することができた。

放流したアユ種苗は、放流地点より上流へほぼ均等に分散した。台風に伴う増水で一時的に魚影は薄くなったが、河川水温および河床状況が回復した8月20日頃から友釣りによく釣れた（図2、図3）。

友釣りでは8月21日～24日の間に釣れた晩期ヤナアユのサイズは、平均全長135mm、平均体重22.4gであり、先に放流された種苗（平均全長178mm、体重51.2g）に比べて小型であった（図4）。友釣りによる釣果（7月29日～9月15日）は、平均28尾／人・6時間、引っかけ、投網（9月1日以降）では平均180尾／人・6時間と、共に良好であった。

晩期ヤナアユの放流時期は、河川水温の上昇や付着藻類現存量増加の2度目のピークに重なり、河川環境は良好であった（図5、図6）。また、友釣りでも好釣果を迎えた時期（8月下旬）は、付着藻類現存量の回復期と一致していた。

春の通常放流（4月～5月）と晩期ヤナアユの放流を組み合わせることで解禁から漁期終盤まで良好な釣果が期待でき、漁場を有効に活用することができる。

*1；水産課

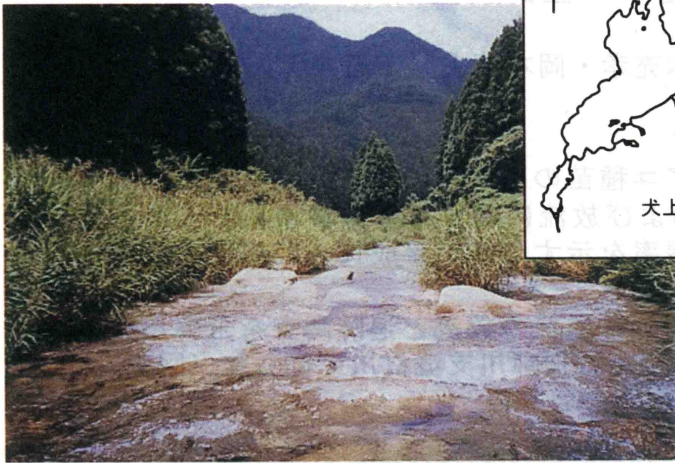


図1 調査漁場(犬上川ダム上流)

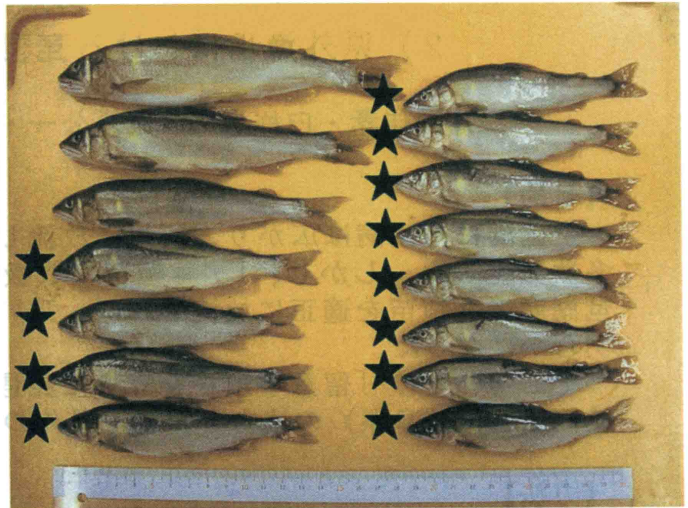


図2 友釣り釣獲魚(8/23) ★ 晩期ヤナアユ

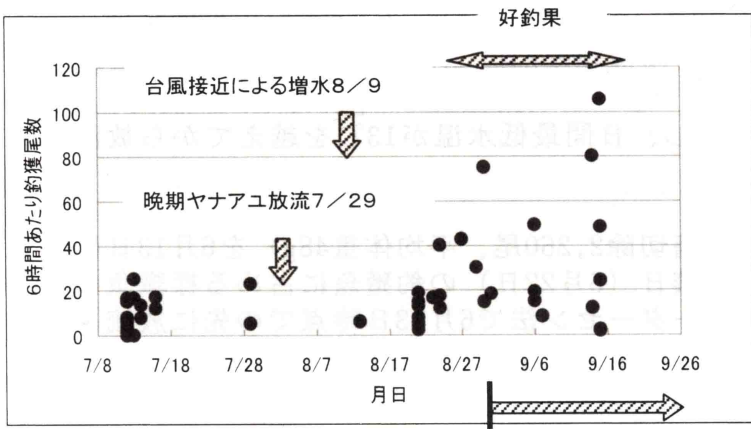


図3 友釣りによる釣果 (6時間あたりの換算値)

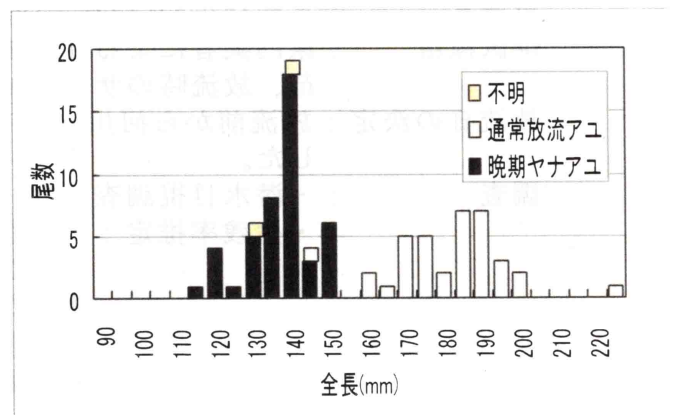


図4 友釣り釣獲魚のサイズ組成 (8/21~8/24, n=84)

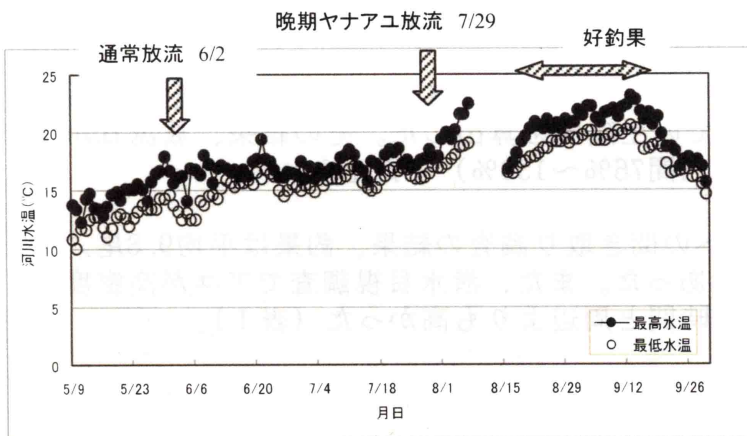


図5 河川水温の経日変化
8月8日~15日までは、台風接近の増水のため欠測。

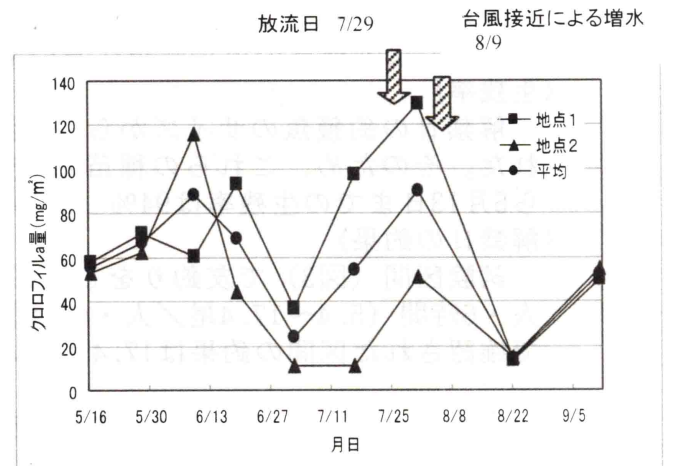


図6 付着藻類現存量(クロロフィルa)の経日変化